

## 1. 会議名称

杉並の教育を考える懇談会（第8回）

## 2. 日時

平成12年10月19日（火） 午後6時30分～8時30分

## 3. 場所

区役所中棟5階 第3・4委員会室

## 4. 出席者

委員

生重、石川、小林、薩日内、高瀬、長谷川、林、平林、松丸、森田

大束委員は都合により欠席

幹事

松本教育委員会事務局次長、佐藤庶務課長、工藤指導室長、荒井社会教育スポーツ課長、秋葉施設課長

事務局

辻教育委員会事務局参事（特命事項担当）、田中副参事（特命事項担当）、飯田庶務課庶務係主査

## 5. 会議次第

（1）開会

（2）前回会議録の確認

（3）本日の懇談テーマ

家庭教育、社会教育、地域の教育力のあり方について

（4）今後の日程について

（5）閉会

## 6. 会議録

**会長** 今日は大束委員が欠席です。まず、事務局から前回の議事録の確認について。

**副参事** 前回の議事録については、先日郵送で各委員宛てに送らせていただきました。何人かの委員からは、訂正の返事をいただいたわけですが、まだ訂正箇所がありましたら早急に連絡いただければ、訂正いたします。もしないようであれば、これで会議録を公開していきたいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

**会長** では、委員の方々、よろしくをお願いします。

今回からは、いままでやっていた「学校を中心に考えた議論」をひとまず離れて、家

庭教育、社会教育などの問題に入っていきたいと思います。前回提示した懇談テーマ案に対して、各委員から討議の内容の提案をいただき、いろいろとたくさんのテーマが出てきました。いただいた意見、提案をまとめて、今後の懇談テーマを資料1のとおりに整理しました。本日は、その中で1の「家庭教育のあり方」について意見を交換したいと思います。事務局から、今日の話題に関連した資料が配付されていますので、簡単に説明をお願いします。

**副参事** では、事務局から簡単に説明します。

懇談会資料1は、前回各委員からお出しいただいた論点を整理したレジュメです。その中で、本日は家庭教育の部分を議論していただくということです。家庭教育がどうあるべきかということに対して、行政としてどういう支援、後押しができるのか。そのような観点で、いろいろな幅広い視点からの提案やアイデアを、是非お出しいただきたいと思います。そのようなことで、資料1はレジュメとして、今後の懇談テーマとしてお使いいただきたいと思います。

次に資料2ですが、現在杉並区で展開している、社会教育に関する主な事業の概要です。それとは別に、席上に「平成12年度杉並区の教育」というカラー版の冊子を配布していますが、こちらにも社会教育の諸々の事業等が紹介されていますので、次回以降の議論の参考資料として活用していただきたいと思います。

本日は家庭教育の部分から議論に入るとのことですので、資料3として、家庭教育に関する主な事業をまとめてみましたので、簡単に説明いたします。

教育委員会が家庭教育の部分にどのような支援をしているかということで、教育委員会関連の事業として1番、2番を挙げています。1番目の「家庭教育学級」は、家庭教育の重要性を考えて、区立の幼稚園、小学校、中学校を会場にして、保護者が家庭教育について学ぶ一助として、家庭教育講習会を開催しているものです。身近な所で学習できるということで、PTAとの共催で実施しています。

2番目の「子ども地域活動促進事業」は、中学校の学区内で結成された実行委員会との共催で、世代を超えたボランティア活動やふれあい体験活動など、地域に根ざしたさまざまな子どもの体験活動を実施しているというものです。

また、教育委員会以外の事業ではありますが、今回のレジュメの中で「子育て支援のネットワークづくり」という論点がありますので、5つほど関連事業の紹介をさせていただきました。

1番目は「地域子育てネットワーク事業」です。これは子どもを通して「出会い、ふ

れあい、支え合う」といったまちづくりを行うため、小学校の学区域を単位として、小学校や児童館、保育園、保健所などの連携で地域団体が連絡会を作って、さまざまな事業を展開しているものです。

2番目は「母親クラブ」という、子どもを持つ母親の自主的な連帯組織ですが、児童館を拠点として、お互いの親睦等を図っていくという活動を展開しています。

3番目が「子育てサポートセンター」です。これは区内の5ヶ所の保育園にこういった機能を持たせて、育児不安など保護者からのさまざまな相談に応じて、育児講座や体験保育、あるいは情報誌の発行などを通じて、子どもの健康や生活習慣など、子育てに関する情報を提供し合っていくものです。

4番目は「杉並ファミリーサポートセンター」で、区の外郭団体である杉並区社会福祉協議会が事務局になって行っています。これは仕事と子育ての両立を支援するためのものですが、子育ての手助けをしてほしい人と、手助けができますよという人が、地域の中で相互に援助しようという会員制の組織です。

5番目は、レジュメでは「学童保育」という用語になっていますが、杉並区の場合は「学童クラブ」と言っています。これは共働きの世帯など、昼間保護者のいない家庭の子どもたちを、小学校1年生から4年生を対象に、遊びを中心とした生活指導を行っており、児童館を主にして、44カ所設けています。

以上が子育て支援の主な事業です。

また、委員の方々の提案の中にあつた「男女共同参画」の分野としては、杉並区は平成9年に「杉並区男女共同計画都市宣言」をしています。その具体的な杉並区の行動計画があるのですが、その中で家庭運営の男女共同参画の促進として、男性を対象にする育児講座などを実施しています。

さらに、「保育園と高齢者施設の連携、隣設化」に該当するものとして、区立保育園44園のうち18園が、敬老会館という高齢者の施設と併設しています。そこでは、敬老の日やクリスマス会などを通じて、現在さまざまな交流行事を行っています。

以上、本日の懇談テーマに関連する資料を用意しましたので、意見の交換をよろしくお願いします。

会長 どうもありがとうございました。「家庭教育」という言葉は、こういう教育行政の中では出てこない言葉のようです。いちばん最初の「家庭教育学級」くらいですか、それ以外はほとんど違った言葉になっています。

2月9日に、私は小さな国際的なミーティングを開いたのですが、アメリカの国立保

健研究所というのがあります。これはワシントンD.C.の郊外にある、がんから始まって、子どもの病気だとか、成長発達を研究する研究所が1カ所に集まって、20くらいの建物があるのですが、その中に国立小児保健人間発達研究所というものがあります。これは、いわゆる子どもに関わる病気ばかりでなく、子どもの健康な成長、発達も一緒にした研究所で、出来て30年くらいになるのですが、ここで全米で1,300人の子どもを生まれた途端に登録して、赤ちゃんのときはもちろん、月に1回くらい調査して、どういう育てられ方をしたかということ記録して、それと子どもの成長、発達との関係を調べるといふ、おそらく人類史上初めてのプロジェクトを始めています。

そういったことを聞いたものですから、そこの代表者に当たる人に来ていただいて勉強会をやったわけです。現在、そのプロジェクトが始まってから約10年になるのですが、ちょうど小学校に入る前の時点のデータが全部出始めています。このような研究をやった国はどこにもありません。例えば小学校なら小学校に入るときに、問題を起こした子が過去においてどう育てられてきたか、ということ調べる研究は日本でもありません。ところが、最初から登録しておいて追いかけていく。「プロスペクティブ・スタディ (prospective study)」と言うのですが、そういうものが、学問的には非常に貴重なデータだということになっているのです。あとでどのようなことがあったか、ということを見るのも多少は役に立ちますが、あまり学問的には意味がないという考え方があります。

このようなデータ収集をやったのは初めてなのですが、そこで非常に重要だと思うのは、要するに家庭がちゃんとしていれば、0歳児保育でも何をやっても大丈夫ですよというデータなのです。成長に影響を受けない。つまり悪いことはない。何が大切かと思ったら家庭が大切だということです。お母さんが大切だということです。これは考えてみれば当たり前の話ですが、そういうものを学問的に証明したデータはない。これは、いまそのあとの小学校だとか、思春期だとかを一生懸命追いかけて、データが今後どんどん出てくるのだと思うのですが、そういう研究をやっています。

これは誰も否定する人はいないと思うのですが、家庭というのは、子どもにとってそういう重要な生活の場である、ということだけは間違いのないと思うのです。しかし、行政から見れば、どこまでタッチできるかということは非常に大きな問題で、なかなか難しい問題だと思うのです。

今日、ここで家庭教育のあり方をディスカッションするのに、7つほどのテーマが出ていますが、まず1から入っていきましょうか。「幼児期からの心の教育・しつけの教

育の充実」ということが書いてありますが、私は生まれたときからのことをきちんとやっておかなければ、幼児期になって心の教育、しつけの教育をやろうと思ってもうまくいかないのではないかと思うのです。本当は、赤ちゃんのころからの育児、保育が極めて重要であって、その延長線上に幼児の心の教育だとかしつけの教育がある。

「心の理論」という考え方がありまして、これは最近、心理学で非常に大きな問題になっている考え方なのですが、大体3、4歳になると、子どもは人のふりを見て、それはどういう意味があるのかということが理解できるようになる。つまり理論的にものを考えることができるようになるという考え方で、これはチンパンジーもある程度、そういう心の理論を持つことができると言われています。

自閉症の症状を呈する子どもという意味ではなくて、医学的に自閉症と診断されるような子どもの場合も、心の理論ができないという考え方がありまして、いま小児科の先生にとっても、心理学の先生にとっても、問題になっているテーマです。ですから、心の教育だとか、しつけの教育というものは、3歳くらいから始まるのではないかと思うのです。それまでは何が重要かと言ったら、やはり優しさを体験するとか、お母さんやお父さんに優しく育てられるなどということが重要だという気がするのです。個人的にはそのように考えていて、自分なりにそういう考え方で発言もしたり、講演などもしたりしているわけですが、もし委員の中にご意見があれば、是非聞かせていただきたいと思います。いかがでしょうか。

**委員** 言われるとおりだと思います。本当に幼児期、乳幼児期、そういうときには「親」しかいないわけですから、それにいかに大事にされるか。ただ、それができるような環境がなかなか作りにくくなっているのだろうということだけだと思うのです。

**会長** 環境が作りにくいということは。

**委員** 例えば生まれた子どもがいて、母親がそれと対面していて、子どもがわずか1人しかいないといっても、そういう子どもとそのまま付き合っていていくということ、あるいは大人の側に、そういう感性というか、耐える気持がないのかどうかわかりませんが、どうも乏しい経験から見ていても、それとじっくり付き合ってみようという親がやや減っているのではないか。たぶん子どもが大きくなって、いろいろ問題を起こす大概の理由は、これは私の観察ですが、やはり子どもが愛されていないからなのです。要するに自分を絶対誰かが愛してくれているというか、大事にしてくれているということがあれば、そう人間は変なことをしないわけです。誰かが自分を本当に大事にしてくれるという、その「誰か」というものが明確にあれば、そうおかしなことはしないものだ

というのが私の理解の仕方なのです。

ですから、結局、いまの子どもたちは大事にされるという記憶が非常に弱いのではないかと。親は親でそれなりに大事にしているとか、一生懸命やっているような気持ちがあると思いますが、生き物というか、そういうものとして「愛されている」とか、「自分は絶対に誰かによって大事にされているのだ」という記憶が、あるいはしっかりとした実感というものが非常に弱いのではないかと。そういう子どもがたぶん幼児期から少年期、青年期という過程の中で間違いを犯しやすいという気がするのです。

というのは、これも私の勝手な理解の仕方ですが、大体、子どもとして生まれてくれば、最初は祝福されて生まれてきているはずだと思うのです。どんな子どもでも、「まあ、かわいい。これはいい子だ」と。それはもちろん言葉はわからないにしても、そう祝福されて生まれて来る。ところが、年を取るにしたがって、「お前はなぜ勉強ができないのか」などと言われる、というように、そこで初めて人間というのは世界との違和感が出るわけです。生まれたときは必ず祝福の中で生まれて来ているけれども、途中から「勉強ができない」とか「鼻が曲がっている」とか、そういう違和感、つまり否定される形でしか人間というのはほとんど生きられないように出てきていると思うのです。

祝福から始まったにもかかわらず、祝福でないような言葉、環境がどんどん積み重なって我々の自我の周りを包み込んでくる。その、祝福された場所から、祝福されていない状況が生まれてくる端境期というものが、非常に大事な場所だと思うのです。そのところで、それを育てる場所である家庭というものがうまく機能していないということに、たぶん問題があるのではないかとというのが私の理解の仕方です。

ですから、行政で例えばそういうことをどうするかといったときに、家の中まで母親の育て方をいちいち言っているような行政などは、あり得るはずはありませんから、あるとすれば、そういう場所で悩む親、あるいはこのレジュメにもありますが、そういうもののネットワークが出来ていくとか、そういうところの中で、その家庭が抱えた問題を、外で何らかの形で討議できたり相談できるとか、そういうものができるということしか、行政としてはこういう問題にはあまり介入できないのではないかと思います。

**会長** 子育て支援ネットワークを、杉並区として整備することが1つの方法だというご意見だと思うのですが、ほかにどなたかご意見はございませんか。特に女性の意見は重要だと思うのですが。

**委員** 意見というよりは、自分の体験から来る感想になると思うのですが、今、いちばん下の子どもが10歳ですから、幼児期の記憶も感触も、たしかにまだ残っています。私

は長年会社に勤めていまして、そのあと子どもが出来て退職をして、それからずっと専業主婦で子どもを3人育てるといふ暮らしをしているのですが、やはり1人目の子育てが本当に大変だった、という記憶がいまだに鮮やかにあります。私の場合は、幸いにして近くに手伝ってくれる親もいましたし、夫も非常に協力的であったということもありましたから、とても恵まれた立場だとは思ったのですが、それでもやはり、何にもわからないところからの子育てということで、本当にときどきは孤軍奮闘という非常につらい思いをたくさんしました。

それが2人、3人目になると少しずつ楽になってきた。その理由としては、やはり1人目、2人目と育てるにつれ、人とのつながりがいろいろできてくるわけです。公園仲間だとか児童館の仲間だとか、ご近所の子育て仲間という方たちが増えてくるにしたがって、そういう大変な経験を一緒に語る人たちが増えてくるにつれて、同じ苦労でも実感としては癒されてくるということがありました。

子育てに関するマニュアルは数多くありますが、実際に「育てる」というのは本当に試行錯誤で、おむつの替え方から、夜中の授乳のつらいこととか、子どもが泣き止まないで、本当に一晩寝られないでつらい思いをすとか、私の友人の中には、本当に抱いていないと泣き止まない子どもを育てた方がいて、ほとんどノイローゼ寸前になったそうです。

でも、世の中には子どもたちの悲しいニュースも出ますが、私の身近な方々が、そういうことをどうにか乗り越えられているというの、人と人とのつながりとか、ふれあいとか、私はまずやはりパートナー、夫の協力がいちばん大きなものだと思います。それから幸運にも自分の親から何かの協力が得られた方。だから先ほど委員も言われたように、そういう協力を得られない方の苦労はさぞ大変だろうというのは、想像を絶するものがあります。

それから、自分から「助けてください」と言うことができたり、「大変だ」という声を挙げられる方は比較的楽だと思うのです。それができない方はやはり苦しんでいるだろうと思います。そして、行政のほとんどのサポートというのは、自分から救いを求めたときには得られるのですが、そうしないで殻に閉じこもってしまった場合は、やはりこういう地域性の薄い所や人間関係の薄い現在では、孤独な子育てに陥ってしまうと思います。でも、最初は必ずお産もするし、保健所での健康診断などもありますから、行政側には、少なくとも必ずそこに「乳児を育てている母親がいる」というデータはあるわけです。行政の側から何かしら一歩踏み出して、大変な思いをしている方たちを、も

う一歩でも二歩でも支援しようというシステム作りというのは、今もきっとしていると思いますが、是非これからもどんどん展開してほしいと思いますし、これからはそういうことでも私は地域の力を大いに利用していきたいと思います。

例えば40代、50代、60代の、少し子育てに対して余裕ができた方たち、そして地域で、いろいろなことで青少年の教育に関して協力してくださる方たちが大勢いるのですが、そういう方たちといかにうまく連携して、本当に身近な困っている方から情報が届いたり、そういう方たちがすぐに駆けつけてあげられるようなシステム作りというものを、これからは地域の民間の方たちと行政がどれだけ連携をうまくしていけるかということが、明るい子育てにつながるのではないかと思います。本当に、何も知らないところからの子育てというのは、女性にとっては大変だと思います。「家庭がちゃんとしていけば」とか、「母親がちゃんとしていけば」ということは、いま考えると私にとってはとてもつらい言葉で、ちゃんとしたくてもできないとか、やはり理性だけではうまくいかないところとか、自分1人の力ではうまくいかないところは最初からありますから、それを家庭でも地域でも行政でも、支えるシステムをこれからどんどん作ってほしいと思います。まして、出産後も働く方がこれからどんどん増えるということで、働く方の0歳児保育の待機がいまとても多いと聞いていますが、そういうことも含めて、これからますます力を入れていくところかなと思います。

**委員** 「ファミリーサポート」が資料3の(4)に出ていますが、これを知らない方が多いのです。私の友人は、身体の不自由なお子さんのお仕事をなさっている方で、駅から習い事の所まで送ってあげるといようなことを、自分の持っている時間の中でやっている方が何人もいます。それはいろいろな形態の中で。あと保育ママのような形でお子さんをお預かりしているとか、そういうことを案外身近にいて知らない方が多いのです。もっとそういうものが具体的に、こういうものも、ああいうものも気軽に利用できるよと。例えば上の子どもの保護者会に行くときに、下の赤ちゃんを連れて行くのはどうもと言われる方も、「遠慮なさらずにどうぞ連れてらせてください。子どもを預けている学校なのだから、同じ親なのだから、泣いても何しても気にしないからどうぞ」と言っても、嫌がる方が多いのです。わりと皆さん、そういうところをすごく気になさる。

各小学校などでも、ごく一部の所ではPTA側が保育ルームのようなものを設けている学校もあったのです。私の住んでいる所とは違う地域なのですが、「ソーシャルアンクル・ソーシャルアント」と言って、地域のおじさん、おばさんを会員登録して、基本的に



は「褒めよう、叱ろう、地域の子どもを見守ろう」という姿勢なのですが、そういうものにこの「ファミリーサポート」とともに会員登録をしていただいて、みんなそれぞれ持っている余暇の時間の中で、あいている時間の中で「自分はこのことができる」というところで、多くの人に関わってもらえるようなシステムを、より具体的に作っていったらどうかということです。

それと児童館で(2)の「母親クラブ」というものがあります。私も母親クラブのメンバーなのですが、杉母連(杉並母親連絡会)という団体がありまして、都にもその母親クラブの連合体のもっと上があります。杉並がいちばん最初に作って、かなり歴史のあるものなのですが、いま休眠状態で、若いお母さん方を引っ張って、魅力あるものとして皆さんに参加いただくような状況ではないのです。そういうところももっと工夫していくべきで、こちら側も努力していかなければいけないというのがあるのですが、もう少し、ばらばらになっているものが、お互いに連携を取り合うことも必要です。子育てネットワークは始まったばかりで、どこもたぶん名ばかりで、きちんとした活動はしていないと思うのです。子育てネットワークの中でこういうことがより具体的に話し合われて、地域の人たちの支援をいただけるようなシステム作りを、行政と協調してやっていけるという方向もあるかなと思うのです。

**委員** 私は働く母親といいますが、まだいちばん下の子どもは3歳ですので、真ただ中ということで、日々世間の冷たい風と闘いながら働いています。というのは、本当にいまも非常に大変で、息つく暇もない毎日で、そういう自分を誰が助けてくれたかなということをつつと振り返ると、やはり委員の方々が言われたように、身近な家族であるとか、本当に個人的なサポートを受けています。保育園に行かせていただいているというのは大変ありがたいことですが、まだまだ保育園のあり方などに関しては、もっとこうしてほしいという事があまりにもありすぎて、どこからお話したらいいかと思って先ほどから黙っていたのですが、決して言いたいことがないわけではありません。

杉並の資料をいろいろ見せていただいて、どの程度実施されているのか、いまざっと見たので、細かい点はチェックしていないのですが、先日も、ベビーホテルのような所で乳児が亡くなるという、事件だか事故だかわからないのですが、不幸なことがあったばかりですが、ああいう報道を聞くと、実態を知らない方は「そんな所によく預けたわね」ということになると思うのです。ですが、私自身も非常に環境が劣悪なベビーホテルに我が子を預けた体験があります。なぜかと言えば、公立の保育園に預かっていたけなかったからです。しかもそのときに復職しなければ自分のポストも危ないなど、そ

ういろいろな勤務条件などもありまして、だんだんには良くなっているのですが、育児休暇がきちんと取れる職場と、そうでない職場があります。法的には取れるはずなのですが、やはり職場の雰囲気その他で、実際にはなかなか取れないわけです。ですから、そういう休暇制度なども、きちんと法律で定められたものが実施されているかどうかを行政の方々にはチェックしていただきたいと思います。

そういう無認可保育所などに、別に好んで預けているわけではなくて、そうしないと働き続けられない状況があるということを考えていただいて、杉並区はいまどうかかわらないですが、私の住んでいる地域では、6カ月経たないと公立の保育所には預けられなかったわけです。その間、結局産休明けからそういう無認可保育所に預けていたのです。ほかの方々も、おそらく預かってくださる保育所があれば、何もそういう条件の悪い所に預けなくて済むと思いますので、そういう保育期間とか、あるいは預けられるようになってからも、いろいろいまは遠方に仕事に行かれたり、私自身もそうですが、保育援助をしてもらっても、まだまだ間に合わなくて、多くの方は自分が家に帰って来るまでの間を、またベビーシッターさんなどに頼んでいるわけです。そういう二重保育をしないで済むような保育園を作ってほしいと思います。

それから、非常に困るのは、例えば子どもが病気になると、「ほかの子どもにうつたらいけないので、休ませてください」と言われて、ではその病気の子どもは誰が世話をするのかというと、主に母親が休暇を取って面倒を見るわけです。そういうことができる職場とできない職場があって、そういうときに、例えば実家の母親に来てもらうとか、いろいろ皆さん、苦労されていると思います。そういう中で、やはり病児保育の制度なども作ってほしい。「ほかの子にうつるから」と隔離ではないのですが、風邪を引いている子が寝ている部屋みたいなもので、やはり看護婦さんとか資格のある方が見てくださったりすれば、非常に安心だと思います。

あとは、先ほども出ましたが、身内の者とか、誰か個人的な知合いがサポートしてくれるという恩恵を受けられるのは一部の人だし、非常にそういうのは恵まれていると思います。多くの人たちは、いま言ったようないろいろなことで具体的にも手が足りません。また、精神的にも子育てというのはいろいろ悩みが多くて、特に1人目のときなどは未経験なものですから、いろいろ迷うわけです。そういうときに保育ママさんのような「遠くの親戚より近くの他人」で、本当に育児経験のある「おばさま」が回ってくれたりして、ちょっとしたことでも話を聞いてもらえたりしたら、どんなに解放されるだろうかということは感じます。

ですから、いろいろ挙げていけばきりがありませんが、あまり行政のほうから強制的に「ああしろこうしろ、子育てはこうでなくてははいけません」というような形で教育するという感じではなくて、昔は同居をするといろいろ気を遣って面倒という反面、いろいろおじいちゃん、おばあちゃんの手があったりして、みんなで子どもを育てる環境だったと思うのですが、いまは気楽に核家族でやっている分にはいいのかもしれないのですが、逆に自分たちだけで子どもの面倒を見ていかなければならない、密室保育化していると思うのです。具体的にも実際の労働的にも大変ですし、精神的に解放してあげるためにも、何か手助けできるようにしたらいいと思います。でもいま資料を見たら、結構企画はされているわけですから、先ほどほかの委員からも出たように、そういうことをもう少し広報なり何なりして、利用しやすくする方向で改善すべき点は改善してほしいと思います。

**委員** 本校の生徒がこの間手首を切って自殺未遂をしたのです。大事には至らなかったのですが、それを見た母親が、次の日に「そんなことは大したことはないから、学校に行きなさい」と言って家を出した。ところが本人は記憶がなくなりまして、さまよい始めたのです。結局警察に保護されたのですが、自分がどこの誰だかもわからない。どこの学校に行っているかもわからないということで、医者に行ったら専門の診断を受けたら、乖離性多重人格という診断が出たのです。それをうちのカウンセラーが聞いて、そういう話がありましたということだったのです。

その子どもの幼児期までずっとさかのぼって調べていったら、幼児期にしつけと称して、父親から相当虐待を受けていた形跡があるということです。父親はものすごく厳しい父親で、会長が先ほど言われたように、3歳くらいから、今からしつけないといけないということで、相当いろいろ厳しいしつけをしたけれども、結局しつけというよりも虐待に近いものがあった。それがだんだん積もって、そういう人格的なものに大きな影響を及ぼして、いまそれが爆発した形で出てきているのではないか、という診断が一応下ったというわけです。

これはいま子どもの虐待ということで、いろいろな問題が出てきていますが、これが一方の現象で、もう一方の現象では、父親が子どものしつけが全くできない。子どもに悪く見られたくないから、子どもには甘いことを言って、どんなことをしてもそのご機嫌を取っている。極端にそういう父親もまた逆サイドにはある。これは現実なのです。

そういう中で、先ほど会長が言われた、3、4歳のころのやっとな理論的に物事を考えることができるようになるという時期に、本当に子どもに対して何をしつけなければい

けないのかということが、いろいろなマニュアルはあると思うのですが、子育てをしている父親、母親にとってみると、その辺のところがちっとも明確になっていないのではないかと。私が考えるのは、最低善悪、良いことと悪いことをきちんと区別するというのを、まず最初にやらなければいけないのではないかと。あとで会長にも是非お聞きしたいのですが、しつけの教育という話があるのですが、行政がこれからどのようにするかという話をする以前に、一体3、4歳あたりから、子どもに何をしつけなければいけないのか、ということ整理しながら、そしてそれに対して大人は何をすべきなのか。つまり父親、母親は何をすべきなのか。それを取り巻く大人は何をすべきなのか。そして最終的には、行政などはどのようにそれにかかわっていくものなのか、というようになっていくのではないかと。ですから、しつけが重要だと言いますが、専門的な立場から、何をこの時期に本当にしつけていかなければいけないとお考えられているか、会長のご意見をお聞きして、それからまた発言させていただこうと思います。

会長 2つあると思うのです。1つはやはり生活していくときに、生命にかかわるような危険なことがありますから、そういう危険から子どもを守るためのしつけというのがあると思うのです。家庭の中でのいろいろな問題もあるし、そういうためのしつけです。もう1つは、人間は社会をつくっているわけですから、社会人として守るべき最低限の規範というか、そういうものではないかと思うのです。

私は、母親なり父親なりが我が子をかわいいと思っていれば、例えば危険なときにとっさに怒って尻を叩いても、それは2歳でも3歳でも別に問題ないと思うのです。子どももわかると思うのです。要するに危険を教えてくれたということで、理解できるだろうと思います。だけど今度は社会の規範としての「何か」をしつけるとなると、これは少し難しいのではないかと思います。特に最近のように情報化された社会では、あまりにも情報が多すぎて、価値観が多様化していて、それを教えるのはなかなか難しいと思うのです。ですが、それはそれぞれの家庭の持っている文化と表裏の関係にあって、家庭を中心にしてまず考えて行くべきではないかと思うのです。

私自身はそのように考えていますが、いま例えば青少年の行動の問題などを見ると、本当にそれだけでいいのか、というようなことがたくさん出ています。したがって、私自身もよくわからない。ただ重要なことは、その乳幼児期に、先ほどある委員が言われたように、要するに「自分は愛されているのだ」という実感を持つこと、そして「生きていく人生は平和である」という、いわゆる「ベーシックトラスト(basic trust = 人間

の基本的信頼)」という言葉は心理学の人たちは使いますが、そういうものを乳幼児期に作っていなければ、厳しいしつけも効果を挙げ得ないと思うのです。だから乳幼児期はのびのびと、優しさを体験させてあげればいちばんいいと思うのです。

いろいろな考え方ができるのですが、イギリスの有名な小児科の先生が「全世界で名を成した人がどういう子育てをされたか」というのを調べてみたそうです。良い意味で名を成した人と、悪い意味で名を成した人で、例えばチャーチルみたいな人だとか、トスカニーニみたいな人を調べてみると、要するに乳幼児期の育てられ方は問題ではないというのです。つまりどんなに立派な人でも、乳幼児期にすごく逆境で厳しい所で生きてきた人もいるし、どんな悪い人でも、本当に恵まれた乳幼児期を過ごしている人もいます。ただ、良いことをした人の中に共通することは、少なくとも1人だけでもその子どもを優しく見る人がいた。それは多くの場合、父親であり母親であると思うのです。あるいは、それがおじさんの場合もあるし、学校の先生の場合もあるというのです。そういうことだろうと思うのです。

ですから、論理的に整理すると、生まれたときの赤ちゃんというのは、大体3人くらいの人間関係ならばいいのではないかと。つまりお父さん、お母さん、保育士とか。先ほど話したアメリカの人間発達研究所のグループも、保育士がちゃんとしていればそれは問題ないですよ、というデータを出したということは、3人くらいはいいだろうと思うのです。ところが保育園をやたらに変えたり、あるいはその保育のセッティングがいろいろ変わったりして、4人、5人と人間関係を持たなくてはならなくなると、それは乳幼児期にとって非常によろしくない。そういうことが1つあると思うのです。

そのうえで、折々の機会に、子どもにも個人差がありますから、割合早くからやっても通る場合もあるし、優しくて気の弱い子ならば、もう少し大きくなってから厳しいしつけが始まってもいいのではないかと。いろいろな関係の中で考えながらやっていくしか方法がない。ですから、子育ては定石がない、というのがいちばん妥当な表現だろうと思うのです。家庭だとか、親子の人間関係だとか、その家庭の経済状態だとか、いろいろなことの中で……。

**委員** 学校教育には専門家がいっぱいいるので、大変意見が出るし、傍聴者も多いのですが、家庭教育に関しては意見を言う人は少なくなって、傍聴者も少なくなっている。これは人類史上当たり前のことですね。いま会長も言われたように、家庭教育というのは定石がないのだと思います。学校教育にはパターンがあるから、それに外れるといけなとか、いいとかと言うのですが、家庭教育にはパターンがないのです。

私はこの36年間世界を歩いて、いろいろな民族の家族を見てきています。パターンはないです。私も5人の子どもを育ててきています。私自身は6人きょうだいの中で育ってきています。祖父母と親と、近くに親戚がいっぱいいる所で育ってきているわけです。父親、母親から物事を習ったという記憶はあまりありません。怒られたことはあります。祖父母から褒められたり教えられたことはあるのです。いつかこの懇談会の際にも言いましたが、文化とか知恵的なことというのは、ほとんど祖父母から伝えられるのです。

前にも話しましたが、例えば北極に住んでいるエスキモーというのは、食べ物のない非常に厳しい自然の中に住んでいますから、祖父母の世代が年を取ると、自らの命を絶つわけです。というのは、子孫の生存を願うために、年を取った人は自らが命を絶っていくわけなのです。そういう、人口が希薄で、多くの人の見本を見ていない若い人たちが、結婚すると2人だけで雪原の中で生活するのです。そうすると食糧を取るのが大変なのです。しかし、たくさんの方がいると生存競争が激しいものですから、仕方なく2人だけで生活するわけです。その2人だけの若いカップルは、実は「赤子」とは何たるものかを知らないのです。そうすると、結婚して子どもが雪原の中で生まれて、オギャーと泣く。言葉が話せない赤子、そして目の見えない、それから歯のない赤子。そんな赤子はお化けでしかないのです。赤子知らない若い夫婦は、それは化け物として殺してしまったり、よう育てないのです。だから子育ての経験のない若い親というのは、この地球上のどこの親も子どもを育てるのは下手なのです。その子どもを育てるのが下手な若い親に意見をし、いろいろ手を差し延べてくれる人たちがそばにいないと、無事には育てられないのです。

私は、妻と年がだいぶ違うのです。私は田舎の生まれで、大家族で育っているのですが、妻は戦後の生まれで、東京育ちです。きょうだい2人しかいないし、祖父母もいなかったのが核家族です。私たちに子どもが生まれてだんだん育ってきますので、子どもが悪いことをすると、私はその場で叱るのです。そうすると妻は「いま叱らなくていい」と言うのです。「あとでゆっくり諭して叱りなさい」と言うのです。妻は「あなたは叱り方が悪い、叱る時が悪い」と言うのです。だけど、子どもが悪いことをしているから駄目だと叱るわけです。それをあとになってゆっくり、子どもの立場のことを考えて諭すように教え、叱ることが果たして教育上いいことなのかなと。

学校教育では知識教育が非常に充実していて、個人個人の心理が非常に重要視されていますから、どんな失敗をしても、どんな悪いことをしても、よく意見を聞いて、わか

ってあげてから罰するとか、怒るという形になっています。個人尊重が非常に重視されているので、悪いからいま叱る、いま教育するということができなくなっているのです。

私たちは親からその場で怒られ、蹴っ飛ばされたり殴られたりしてきた。先生には悪いとその場でムチで叩かれました。いまは学校で、悪いからと体罰すると大変です。家庭でも親が子どもの心理を読み過ぎてしまって、子どもの立場になって、ああでもないこうでもない、いま怒っては子どもがかわいそうだという。そういう配慮はいい面もあるのですが、正直言って人間教育としては問題があるのではないかと。理屈が先行してしまって、善悪ではなくなっている。ですから、あとで諭せば子どもは気分は悪くないし、怒られたことも「ああ、そうか」と納得するからいいのですが、我々が小さいときは、悪いから悪いのだと大人の価値観で怒られた。いま、私が子どもたちを怒ると、どこが悪いのだと言う。それで私は妻を怒るのです。私が怒っているときは口を出すなと。そうすると、常に妻は子どもの立場になって、いま怒らなくてもいい。子どもは嫌な気持ちだ。悪いことは子どもでもわかっていると。そういうことを言うので、私もそれはいいところもあるかなと思うのですが、私たちの育ち方からすると、いまの日本人の、しかもかなり高等な教育を受けている人たちの子育てというのは、一体何を基準にしているのだろうかという気がするのです。本当に子どもを育成するための家庭教育になっているのだろうかと考えさせられる。

私は、怒り方も育て方も見本はないと思うのです。親の悪いところは、反面教師になって、子どもは「あんな人になりたくない」と思うし、親が良ければ「ああいう人になりたい」と思うのですが、親に近づこうとしない、反発しようとする子どもというのは、家庭での教育がうまくできていないのではないかとと思うのです。私たちは自分の良い悪いではなくて、親が悪いと思ったから叱られた。私は親によく叱られたから、大きくなったら子どもは叱らないぞと思って育ったけれど、いま叱っています。ああいう親にはならないぞと思ったのですが、何か非常に似たことをしています。ですから、子育てにあまり理屈を言い過ぎてしまって、知識が先行すると子育てができにくくなってしまっているのではないかと思います。

私は民族研究で、入って行く所は大体非文明社会ですから、学校教育はない所です。そこで、親が子どもに何を教えるかといえば、生きるための知恵です。例えば5、6歳くらいになって、親とともに行動ができるようになると、何が食べられるか、何が毒かを言い、アフリカなどではあの動物は危険か危険でないか、どこまで接近できるのか。

こんなことを徹底的に教えるのです。それをしなかったら生きられない。

日本の場合は、しつけというのは行儀作法、言葉づかいみたいなことになっているのですが、本来は生き抜く力を伝えることだったわけです。生き抜く力というのは、大人が物事の良し悪しを判断して伝えたり教えたりしているとなかなか伝えられない。その場で教えていくことが非常に重要なのではないかと思うのです。子どもが何か行動をしたとき、何かあったときにすぐその場で教えていくということが、いまは非常に難しくなってきました。家庭教育には専門家はいないし、理屈どおりにはいかない難しさがあるのではないかという気がするのです。

私の家庭も教育上は決してうまくいっていません。まず子どもを叱ると、私が子どもを叱っているうちにだんだん夫婦げんかになってくる。結局、その夫婦げんかを子どもは見ています。「お前がいらんことを言うからいけないのだ」と言うと、「いや、あなたの叱り方が悪いから」と、子どもそっこのけで夫婦でけんかをしてしまうことが、果たしてこれで子どもの教育にいいのだろうか。ですから、私は妻に「私が叱っているときは黙っておれ」と言うのです。

私は多くの青少年の育成をしてきたのですが、具体的には自分の家庭のことしか知りません。男女参画時代、男女平等時代になっていますが、父親が怒ったときに母親は黙って聞いていればいいのではないのでしょうか。父親が悪ければ、子どもたちは「あんなお父さんにならないように」と心がけます。怒っている現場で、その怒っている効果を半減させるようなことをしてしまったら、何の役にも立たないのではないかと思うのです。

**会長** 私は講演などを頼まれてそういう話をするときには、「お父さんが叱っているときに絶対そういうことを言っではいけない。逆に、あとでお母さんが優しく諭して、お父さんはこういう意味でお前を叱ったのだからよく考えなさいと、優しく言ってあげたらいいのではないですか。逆に今度はお母さんが叱っているときはお父さんは何にも言わない、ということが重要だ」という話をします。でも、委員は我が子を大切に思って、かわいいとっていて怒鳴りつけるのだから、それはそれでいいと思うのです。家庭教育には定石はないわけですから、私はそれでいいのではないかと思うのです。

**委員** 1つには役割というのですか、夫婦の役割。いま会長が言われたように、例えば片方が怒っていれば片方は黙って聞いていないか、それも家庭だから私はいいいのかなと思いますが、やはり1つ大事なことは、その子どもが納得しているかどうかという問題が大きいのではないかと思うのです。3、4歳でその子どもが納得している



かどうかわかりませんが、少なくとも自分の行動がわかる時期になってきたときに、いまなぜ叱られているのか、なぜ褒められているのか、自分が納得できているかいらないかで、その後の成長に大きな影響を与えるのではないかと思うのです。

いまの委員の家庭を出して申し訳ないのですが、結局お父さんが怒っても本人はわかっています。おそらくわかっています。お母さんもわかっていると思うのです。そういった中で育てられている子どもというのは、やはり両親から愛されているのだと感じています。多少表現は違うと思いますが、やはり私はいちばん大事なものは、その子が納得しているかどうか。そこがいまいちばん大事ではないですか。

いま新聞などでも、今週も親が簡単に子どもを殺したり、子どもが親を殺したりという例がたくさんあります。私は、根本的には愛情の表現のまずさというか、愛情の欠損家庭というか、それは一概に言えない部分もあると思いますが、やはり両親の愛情のかけ方、かける時、そういったタイミングの難しさも逆にあります。それでも、両親が一生懸命愛情をかけても駄目なときもありますが、基本的には私はやはり愛情ではないかと思います。それを納得させるような両親の行動とか、していることを子どもに見せるしかないのではないですか。ですから、4番の「大人の社会的規範づくり」と非常に関連してくるのではないかと思います。

**委員** 今日、各委員の家庭教育のあり方を学ばせていただきまして、大変参考になりました。なんといっても家庭というものは、家族の成員が楽しく過ごす場所ではないかと思います。したがって、先ほどから会長にもお話いただいているように、親が子どもを育てるためのしっかりした信念や考え方を持って家庭教育を進めていくことが、いちばん大事なのだということも確認していきたいことだと思います。

ある教育研究所が、子育てについて調べた結果があります。それを読んでもみると、子どもはかわいいのだ、あるいは子どもを育てることは大変楽しくて幸せなのだ、あるいは子育てによって自分も成長しているのだ、という意識を持っている親は、大体90%から95%くらいいます。よって、このような多数の親は、子どもと接している家庭生活の中で、いい家族関係を作ろうという意識を持っている方が多いということがわかります。しかしながら、反面子どもが大変煩わしくていらいらしてしまうとか、あるいは子どものことでどうしたらいいかわからなくなる、あるいは子どもに八つ当たりをしたくなるという意識を持っている方も、50%から60%いるという報告があることもわかりました。

ですから、こういった現状を見ると、家庭においては子どもを中心に、家族関係

をいいものにしていこうという努力をしている反面、何か自分で子育ての仕方がわからなくなったり、あるいは何かにつまずいてしまったり、他の子どもたち同士の関係でいさかいが生じたりしてしまうと、一体子どもをどうしたらいいのかわからない、という形で悩んでいる方は案外多いのではないかという気がするのです。

この原因は何かと考えると、1つには人とのかかわり合いが希薄化しているというか、薄れてしまっているのではないかと思うのです。お母さんが子どもの手を引いている姿というのはよく見るし、あるいは一緒に遊んでいる姿もよく見るのですが、何か子どもの興味、関心におかまいなしに、自分のペースで子どもの手を引いたり、あるいは遊んであげている姿というのを多く見て、子どもとの接触度、あるいは密度と言いますか、薄くなっているのではないかという感じを持ちます。

それから人と関わることを面倒がるというか、うちの子どもは自分の家庭の範囲内で見ていればいい、あるいは、多くの人たちとの関わり合いを持たなくても、自分の家庭さえ良ければという意識が案外強くなってきている現状もあるのではないかと思うのです。そういう状態の中で、人との関わり合いというものが、やはりだんだんと希薄化しているような現状ではないかという気がするのです。

このような状態であるからこそ、先ほどから出ているように、小さいときから子育てのネットワークというか、人と交わる機会を多く作ってあげて、その環境の中で子どもを育て上げていくことが、すごく大事なことはないか、というご意見が多かったのではないかと思うのです。これも、これからの子育てのためには欠かせないことではないかと考えます。多方面で情報活動が発達してきた時代ですから、自分と同じ悩みを持っている人とか、あるいは自分が子育てにつまずいた場合、困ったことなどを気楽に相談できるとか、あるいは一緒になって考えてくれる活動仲間というものを求めているのではないかと思いますので、情報を広げて大いに利用して、ネットワークを広げていく必要があり、多くの方に知らせていただくことはとても大事なことはないかと思うのです。

それから3歳、4歳ごろに何をしつけるべきかという話がありましたが、これもいま言ったように人との関わりを持たせることは、やはりしつけの中でもとても大事なことだと思います。先ほど会長から3歳からのしつけのお話があったのですが、これも大事なことはないかと賛同します。そのほかに基本的な生活習慣というか、睡眠から始まって起床や食事の問題など、どうしても生活の中でやらなければならない面のしつけはやはり欠かしてはいけないのではないか。これは何のために必要かという、自分が1

人になっても生きることができる力、いわゆるたくましい生活力をつけるために、基本的な生活習慣は小さいときからしつけてあげて、それを身につけさせておくことは大事なことはないかということです。

それから遊びとか運動をやらせておくということです。身体を動かしていくということは、これは健康の基になることです。健康づくりにつながっていく要素が強いのではないかということです。したがって3歳、4歳のときから、外で運動をしたり遊んだりするという「身体を動かす」ということを、家庭生活の中で経験させておくことが是非必要です。

もう1つは、小さい子どもは小さいなりに、自分のできる仕事を持たせることが大切です。それがお手伝いに発展して、このお手伝いが自分の身につけば、大きくなってボランティア活動にもつながる要素になるのではないかと思うからです。3、4歳あたりで自分のできる範囲内の仕事を自分でやらせていくという生活の中のしつけが、私はとても大事な意味を持っているのではないかという考えを持っています。

**委員** 私もいまの委員の考えに、多く共鳴するところです。私は、小学校の低学年あたりに学級崩壊などを感じるわけです。4歳、5歳の子どもたちを見ていると、小学校に向かうその前段階で、幼稚園の「年長組」と称していますが、その子どもたちがこれでもいいのかなという部分を、時に感じるがあります。したがって、幼稚園の中で、小学校へ送り出すときに最低限のしつけ、また家庭でのしつけもあろうかと思うのです。いわゆる1人で、家族の中でやっていいことと、集団や社会に出てやれることと、これは当然違うわけです。小学校の中へ、また電車に乗って外へ行くというような場合には、やはり事前に当然ながらその車内でどうしたらいいのか、食事のときにはどうしたらいいのかということは、やはり家庭のしつけだと思っています。そういうことを思っています。

2番目は、「自信」をつけるということが大切ではないかと思えます。家庭の中での自信、もちろん学校教育もありますが、子どもたちに「君はどのような職業に就いてみたいか」とか「君の得意はどんなこと」と聞くと、「別に」などと言って、なかなか自分の意見を言いません。ですから、国際社会に出たときに、やり合っても自分の国の良さとか、自分の素晴らしさはどういうところということは、たぶんなかなか言えないのではないか。ディスカッションしたときに負けてしまうのではないか。ですから、それだけのためではありませんが、自信をいかにつけさせるか。

ある家の子どもで、いま野球もやり、バスケットボールもやり、何もやりと非常に忙

しい子が、最近「僕は野球で全国大会に出たい」ということを言うようになって、これは素晴らしいなと思ったのです。出るか出られないかは別にして、そういう夢をしっかり持って、夢中になるものを持っているということ、それがその子どもを伸ばす基になると思います。保護者の皆さんにも「おたくのお子さんは、どんな所を自信を持ってやっていますか」と聞いても、なかなか言いません。遠慮がちということもあるのかもしれませんが、もっと自分の子どもの良さを学校と一緒に、その子の素晴らしさをもっともっと自信を持たせてあげたいなと、有用感を培いたいなと、この辺が1つ大きなところですよ。

最後に、子育てについての行政とか、いろいろな支援もありませんが、父親の出番をどうしても忘れてはいけません。委員の方々の意見は当然だと思いますが、ただ日本の国独特の経済、社会、そういうシステムがありますので、上では経済の団体がいろいろ言ったり、お互いに考えたり、いろいろな所で言われているわけですが、これができない、なかなか難しい。その辺に家庭の特に主婦の方だとか、お母さん方の悩みがあるのだろうと思います。

幼稚園の保護者を見ていると、大変若いお父さん方が、このごろ積極的に参加するようになってきました。そのお父さん方が少し役職に就いたり、ベテランになってくると上から叩かれてなかなか難しい。時間的にも取れなくなってくるのかなとは思いますが、父親の出番というのは忘れていけない、もっと出てほしい、出なければいけないのかなと思っています。細かいしつけなどは母親かと思うのですが、大きなしつけ、なぜ生きるかという意味だとか、ある面でのいい意味での強さなどは、父親がしっかり後ろ姿なりその意味を子どもに教えてあげることが大切かなと思いました。

**委員** いまの委員の意見を、途中まではそうだ、そうだと思って聞いていたのですが、最後の締め括りのところで、父親だけが人生の生き方を教えるのかなと思って、ひとこと言わせていただきたいのです。

いま少子化が進んでいますが、どうして女性が産まなくなったかという、これは大変だからだと思います。男女平等で、一応学校教育を受けてくるのですが、最後の子育てという大変な段階になると、男の人たちは「あとは女の人、よろしく」と言って逃げたて行ってしまうという感覚があります。そういう印象を持っています。この「男女共同参画の推進」は私が提案しているわけですが、これからそういう少子化の傾向を押さえたりとか、豊かな子どもの教育を行っていくのは、「いかに男の人たちが育児に参画するか」にかかっているのではないかと、言っても過言ではないのではないのでしょうか。

例えば、いま閉じこもりの問題などがありますが、調べてみると、そういうことになってしまう家庭は、父親不在ということが1つの傾向としてあるのです。

先ほどいろいろ委員などからお話があって、叱ってもそれが夫婦でどうのとか、とにかくいろいろな形態はあるとは思いますが、子どものことに関心を持たれて、叱るということでちゃんと育児に参画されているわけです。ですから、そういうご家庭は特に問題はないと思うのですが、本当に「自分は仕事が忙しいから家のことはお前、よろしく」と奥さんにすっぱり預けてしまうようなお父さんですね。でも、そういうお父さんが結構日本では多いのではないのでしょうか。そういうところに、父親は背中では何かを感じ取ってくれればいい、ということが美德のように言われていますが、では働く女性も背中を感じ取ってもらって、何にもしなくなってもいいのかなと思うのです。社会的な役割は同じように果たしていても、女性は家庭もやらなければいけない。でも男性はそれは免除されるというのは、非常に不公平なわけです。ですから、どうしても男女平等の学校教育を受けてきた、私たちよりも若い人たちになってくると、だんだん、そういう損をするような大変なことだけを女性が背負っていくのはもう嫌だというのが、いまのこの少子化傾向に表れている1つの要因ではないかと思います。

ですから、これは杉並区だけで解決する問題ではないのです。社会全体で、そうやって男性も女性も協力して育児をしていくのだ、という意識改革をしていかなければいけないと思うのですが、そのためには、やはり教育もかなり寄与できると思うのです。例えば性教育という、子どもをつくるところまではかなり教育の場でも話題になってきているのですが、その先の本当にどうやって赤ちゃんを育てていくのかということは、あまり学校教育の中で触れられないのです。それがすごく不思議で、女性であっても、全くそういうことを習わないで大人になってしまって、妊娠した人だけが病院や保健所の母親学級で「ああ、こうだったの」と習うのです。私自身は大学病院の母親学級に行ったのですが、いろいろな異常な分娩の症例などを教えてもらって、まるで医学部の学生になったような感じで、実際に何も子育てには役立たなかったのです。ブドウ腹とか、ああいうのを習って、不安な気持ちでいっぱいになっただけでした。

ですから、そうではなくて、せっかくそういう性教育など、あるいは家庭科の男女共習ということがいま積極的に取り組まれていると思うのですが、それを一歩進めて、育児も家庭を築くということの重要な1つの柱として、お父さんもお母さんも協力してやるのだということ、教育改革の中で入れられるのであれば、是非そういうことも進めていただきたいと思います。

私たちの業界でよく言っているのですが、「親が言うように子どもはならない。親のようになる」という、ことわざみたいなものがあるのです。ですから、やはり自分自身がお父さんとも関わって、お母さんとも関わって家庭生活を送ったお子さんは、また自分が親になったときに、男女を問わず、子どもと深い人間関係を持っていくのではないかと思います。母親にはこういう役割、父親にはこういう役割と、いろいろ伝統や文化というのはあるので、すぐには変えられないのかもしれませんが、少なくとも若い女性の意識としては、「もうそういうことでは私たちは子どもを産みたくないわ」という感じになってきているのではないかと思います。

会長 「育児への男女共同参画の推進」というのは、もう少し進めて、思い切って女性型の社会にしてしまったほうがいいのではないかなと思うのです。私は「女性指向型社会」と言っているのですが、北欧3国はある意味ではそうだと思います。例えば代議士の数を決めるときには、これだけの数は女性を入れなければいけないと決めるわけです。そのように女性が仕事をやって、子育てをやって、子育てを男性も手伝うというのは当たり前前にしてみても、乳児のときは、母乳で育てるとなれば、どうしても女性がやらざるを得ないと思うのです。そういうことを考えると、もう少し妊娠、分娩、育児を含めた部分だけ女性寄りの社会にしてしまう。たとえば赤ちゃんを産んだら、仕事は3年間ゆっくり休みなさいと。どのような職業でも、そこまで徹底してしまうというくらいにしないかぎり、21世紀のビジョンは出て来ないのではないかなと思うのです。

だから例えば「エンジェルプラン」と言って、保育を充実すると言っていますね。だけどいちばん欠けているのは基本的な考え方です。ですから、私は厚生省の人口問題審議会で、そんな男女平等などと言っていたのでは絶対直りませんよと言ったのです。女性指向型社会にしてしまいなさいと。そのくらいやっても、別に不都合なことは1つも起こらないと思うのです。そのようにしなければ、おそらく21世紀の社会は成り立っていないのではないかなと思うのです。

どうしても女性は妊娠し、分娩し、おっぱいを出すというハンディを持っています。もちろん、小児科の先生が「一生懸命いいミルクを作りましたから、おっぱいをやらなくてもいいですよ」と言いますが、でもバイオロジーはそうなっているのです。ですからそこまでを考えて、もう少し女性が仕事をできるような社会を作るということです。ですから私は、「男女共同参画型社会の推進」ではなくて「女性指向型社会の推進」と言うのです。

ノルウェーの政府で、国会でおっぱいを飲ませた女性の代議士がいます。ノルウェー

に行ったときに、その人と話をしたことがあるのですが、その人は児童家庭省の大臣をしているのです。つまり厚生省の「児童家庭局」が「省」になっているのです。そして家庭と子どもと女性というものをどう国としてサポートしていくか、ということを中心にやっているのです。それは1つの大きなモデルだと思うのです。ところが、日本は「男女平等参画社会」と言っていますが、「男女平等参画社会にする」と言っても、それはなりません。女性指向型の社会にすると、ちょうどフィフティ・フィフティくらいになると思っているのです。

赤松さんが労働省の局長のときに、育児休業制度を導入しました。私はあのときの委員会のメンバーだったのですが、そのときに、「女性が働いて育児休業を取って、ベネフィット（benefit = 利益）を計算すると、損するか得するか」というディスカッションが出たのです。女性は長生きをするから、育児休暇を3年間与えても、元は取れるという計算だったのです。私もそうだと思います。ですから、もう少し大らかに考えればいいのではないかと。いまは何でも、好むと好まざるとにかかわらず、どうしても男性中心の社会になっているのです。

例えば権利という考え方を見ても、権利という考え方はマグナカルタで始まったというでしょう。あれは貴族と僧侶の権利だったわけです。フランス革命と独立戦争で、200年前に市民は権利を得た。「ライトマン（Right Man）」になったわけです。だけどそれは「ライト・オブ・男性」だったわけです。だから国際連盟や国連が一生懸命やって、やっと1979年に女性の平等権利条約というものを作ったわけです。そして子どもの権利を1989年、いちばん最後です。そういうことから考えてみても、どうしてもいままでの文化が男性中心の社会になっていたということです。しかし、いま見ていると、女性のほうはますます元気良くて、どうもこれは女性に任せたほうがいいのではないかと、という感じがしないでもないです。ですから、そういう能力のある女性のがびのびと働けるような社会にするということは、私は女性指向型社会だと思うのです。それは北欧3国が大きなモデルになっていると思うのです。

**委員** 日本の社会は、ある種の女性の限定社会というか、そのように指向すべきだと思います。たぶん男からは何にも出てこないと思います。私の観察によれば、政治も経済も含めてですが。

先ほど「男女共同参画社会」と言いましたが、私は1つ、こういうことで疑問に思っていたことがあります。私は育児は好きで、子どもが生まれたときから子育てをやった経験があるのです。出産にも立ち会いました。子どもが出て来るところを「見るか」と

医者が言うから、そこに立ち会って全部見てあげましたが、そういう経験というのは私には非常に役に立っているなと思いました。

産むときに至るまで、全部経験させるわけです。とにかくお腹が大きくなったら奥さんを連れて行って、旦那が病院と一緒にいくわけです。いつ陣痛が始まるかわからないからということで、そういう時にはどこを押せということ、病院で講習会をやるわけです。それで病院に行きますと、男どもはお腹の大きい奥さんを連れてくるのです。それを見ているとばつの悪そうなことといったらないのです。みんな旦那さんが後ろについていて、お腹の大きい奥さんと立ち会って、全部それを教えているわけです。そういうものを全部契約して、その病院で産むということをやりますから、産むところまで立ち会いました。

私は当時失業していましたから、子育てをやってやろうと思って、おしめ替えからお風呂入れから幼稚園に連れて行くのも、全部というのは語弊がありますがやりました。ほかにやることはありませんから。私の人生の中で、あれほど面白い経験はなかったという記憶があるのです。

何を言いたかったかということ、例えば育児休暇とか出産休暇ということ、女性に与えるでしょう。私はそれをむしろ男に与えるべきだと思うのです。女性はもちろん産んだあとですから、体調の変化とかいろいろありますから当然休むとして、男が育児のために1年休む。半年休むのもいいと思うのですが、むしろ企業社会というものは、男にそれを与えるべきで「自分の奥さんが子どもを産んだのだから、お前も一緒に休め」という、そういう社会にある器量というものが、日本の国はなさすぎると思います。あるいは社会が持つべき度量と言いますか。自分の奥さんが子どもを産んだのだから、お前が会社を休めという。3カ月間なら3カ月間、まさにそれは育児休暇です。そういう思考が、ついで日本の社会では、あまり議論が起こったことはないのではないかと思うのです。女性が休むべきだということはあっても、会社が給料を持つから、男性が2カ月、3カ月、奥さんと一緒になって子育てをやるべきだ、という発想も議論も起こったことがないのではないかと。

なぜそのようなことを言ったかということ、たぶん日本の男というのは、そういう問題に対して全部逃げ腰だし、そういうことに直面してこなかったと思っているのです。いま女性が子どもを産まない。それであわてふためいて「少子・高齢化社会をどうするのだ」と、政治のレベルでそういうことばかり議論しているわけで、私の理解でいえば、女の人が産まなくなるのは当然です。



むしろ、例えば行政というものが、そういうことでこの家庭の問題、あるいは育児の問題ということで、何らかの形でイニシアチブを取るとか、議論を出すというようなことがあれば、例えば杉並区などで率先して日本初の「男が休め」と。杉並区の職員の奥さんが、あるいは杉並区の公立学校の先生方が子どもを産んだら、夫に3カ月間休暇を与えて、そこで奥さんと一緒に子育てをしるとか、私はたぶんそういうことくらいから始めていかないと、日本の中になかなかこれから育児だとかそういうことの形が出来ていくのは、大変難しいと思うのです。ますます子育ては嫌だし、わずか1人の子どもでもますます子育てが難しい。そういう社会が目の前まで来ているのではないかと思います。むしろ男どもにそういうことを社会が与えるべきだと思います。それがむしろ本当の男女共生社会ではないかと思っています。

別に女性の肩を持つとかそういうことではないのですが、私は、日本の男は大体エネルギーを使い果たして、終わっているという認識がありますから、むしろ女性のお手伝いをして、男は生きたほうがいいのではないかと思っています。これは本気でそう思っています。本当にそう思っています。

**委員** 委員の方々がおっしゃったように、そういう状況になるのがいちばん望ましい。それは「私が育てたい」、「じゃあ、僕が育てるよ」と、お互いに夫婦でコミュニケーションを取って、どちらかがそういう希望を出してそうなるのは本当に素晴らしいと思うのですが、それはかなり恵まれた生活をしている、ちゃんとした所にお勤めの方がそういうことができるわけで、そうでない方たちもたくさんいるわけです。

私も自分が子どもを育てたときに、両女性委員が言われたように、1人目のときは目茶苦茶だったと思うのです。先ほどパーセントをおっしゃっていましたが、本当に子育てが嫌になって、子どもに八つ当たりをしそうになるという気持も、とても具体的によくわかります。そういうところで、いま我々が、できればもっと前向きに、杉並区はこういう取組みをしていくのだよ、ということを示していけるとしたら。

例えば、いちばん手のかかる1人目のときの0歳から、家庭に閉じこもらなければいけないわけです。理不尽な夜泣き。全部整えているはずなのになぜ泣くの。一晩中なぜ泣くの、わからない、という状況を「大丈夫だよ」と言って救ってくれる手、声をかけてくれる、地域の中からそういうところをサポートしてくれるシステムがあればいいと思うのです。

いちばん痛切に思ったのは、自分は両親を早く亡くしていますし、夫の両親もわりと早く亡くなっているんで、どちらも支援がもらえない状態で3人育てたのですが、年が

近い分、子どもが病気になると、車の免許を持っていないものですから、サーカスのように自転車の前と後ろと背負うという状態で病院に行かなくてはいけないのです。そういうときに、病気でない子どもを、ちょっと病院に行っている間誰かが見てくれるだけでも、本当に心から安心して病院に行けるわけです。病院というのも、すごくいたずらに時間がかかるのです。予約を出して、診ていただけるまでにすごくかかる。病原菌がいっぱい蔓延している所に、なんでもない子まで背負ってたくさん連れて行かなくてはならない。

子どもを1人だけ、スマートに育てている方は、そういう苦勞はないでしょうが、これから少子化という中で、例えばたくさん子どもがほしいと思っている夫婦がいたとしたら、そういう本当に小さなところから気軽に支援が受けられるような状況を作れば、もっといいのではないか。働くお母さんにも気楽に、会社から急いで病院に行かなくても、代わりに電話をしたら保育園に迎えに行ってくれて、病院に連れて行ってくれるとか、そういうことをやっていただけるシステムがほしいのではないか。将来的には委員の方々が言われたような社会がやって来て、誰でも楽しく子育てができるようになっていけばいいのかなと思います。そこをまた地域の中からサポートしていったらいいのではないかなと思うのです。

**委員** 皆さんの話に水をさすようなのですが、私は民族研究をしているので、母系社会の中で生活をしたことがあるのです。私の次の本が『母系社会探訪記』という本です。

北欧の母系社会とはまた少し違うのですが、稲作文化における母系社会では女が中心で、男は風来坊なわけです。家族は全部女性の姓で、所有権も全部女性。子どもの名前も全部女性のほうです。男は女にサービスして、女性が気に入らなかつたら男は追い出されてしまう。私はそこで生活をしてみて、よくこんな所に生まれなかつたと思ったのですが、その反面、女性の心理的な苦勞は大変なものなのです。日本では男がさんざん大きな社会で苦勞していて、女性は家庭で案外しんどいようだけど楽な面があった。本当に家庭とか大きな社会の中で前面に立つと、いかなる社会でも人間はストレスが出てくるものです。母系社会だから、女が中心で非常に威張っていいだろうと思って見ていたら、実はそうではないのです。多くの女性が「逃げたい、こんなこと嫌だ」と。日本の女性は、男は強くて女は弱いと言っていたのですが、女性はそんなに弱くなかつたと思います。日本の場合も、外面は男なのですが、本当は家庭を牛耳っているのは女だったのです。

日本はいま男女を区別して子どもを叱れないです。私が妻とよくけんかをするのは、

私の家庭のことばかり言って申し訳ないですが、まず長男に「お前は男だから、そんなことをしたらいかん」と言うと、「男だから」と言うなど。「お前は女の子だから、そんなことをしたらいかん」と怒ると、「女の子だから」と言うなど言う。これだとやはり価値観がないのです。男も女も同じだと、親としてはどうやって怒っていいかわからない。

いま母親たちが「ネットワークが大事だ」と言うのですが、日本はネットワーク、形につぶされているところがあるのです。日本人は戦後何を失ったかということ、社会性を失っているわけです。自己中心、利己主義になっているわけです。いま委員が、子どもを3人抱えて大変だということでしたが、うちの妻は5人抱えていますから、それはよくわかっています。たしかに何か緊急のときには子どもが3人、5人というのは大変です。いざというときに社会性が成り立っていたら、そこはいくらでも補えます。成り立っていなかったら、いざというときに非常に困るのです。いざというときでなければ、利己主義は気軽でいいです。他人に迷惑をかけないし、他人とかかわりを持っていないわけですから。

やはり社会人として生きるということは、自分もほかの人の面倒を見なければいけないし、見られなければいけないという、その日常の互助活動が大変重要なのです。日本の都会、特に東京では日常生活の互助活動がなくなっている。いざというときにほしいから、「ネットワーク、ネットワーク」と言っているのですが、これには社会性はないです。いま私などが青少年教育をやっていちばん困るのは、子どもたちにどうやって社会人としての意識を持たせるか。これは非常に難しいです。ネットワークというのは、今いろいろな所でインターネットなどを使ってやっていますが、これは形、組織化なのです。組織化は簡単にできます。簡単にできているのですが、実はそれは社会性ではないのです。社会人としての心ではないのです。心がないということは、価値観が共通していないということなのです。

ですから先ほどの、子どもを教育をするときに、例えば3歳、4歳のときに何を教えたらいいかということは、結局人間が生きるに必要な基層文化を教えるわけでしょう。社会にとって必要なこと、例えば言葉、風俗、習慣、衛生、価値観、生活文化等は、生まれてからすぐ教えてきたのです。それを伝えなくして、こういう形だけ、いざというときに困るから、援助・協力してもらうための組織を作ろうというのは、よりよい社会ではないです。

アメリカに行ってみると、非常に人間性のない、社会性のない利己的な社会です。日

本はもともと定住民族の信頼社会であって、互助活動が成り立っていたのです。いま日本では「ボランティア、ボランティア」と言っていますが、ボランティアと互助活動は全く違います。本来、社会人として生きるためには互助活動がなければいけないです。昔はそれを「奉仕」とも言ったのですが、そういう1つの社会性を、また心を、価値観を共通して持たなかったら、子どもの教育もできないのではないかと思うのです。

私は子どもを叱る場合には、「それをしてはいかん」「こうだからいけない」と言うのですが、どうしても言いたいのは、「男の子はしっかりしろ」と言いたいのです。日本は戦後平等になって、「お前は男だ、しっかりしろ」ということができないのです。母系社会では、男の子にしっかりしろということは絶対ないです。男は生まれながらの動物として奔放です。風来坊です。

日本ももともと母系社会なのです。それがどうしてこういう父系社会になったかといえば、作為的に作られたのです。それはなぜかというと、社会を大きく発展させ、安定させるために、女性たち、または男の知恵者たちが考えたことは、絶えず平常心でいられる人間、男に権力を持たせようとしたのです。

女性は生理的な問題もあって、不安定状態があり、感情が非常に昂るときもあるものですから、そういうもののない男性に安定感を求めた。家庭教育とは何かと言えば、女性教育よりも男性に対して「お前は男だ、しっかりしろ」と母親がやってきたのです。だから第2次世界大戦が終わるまでは、男が威張っていたのです。戦後は「男だ、しっかりしろ」と教育されていないから、我々の世代はもう男女同じなのです。ですから男が女に対しても社会に対しても、非常に無責任です。いま日本が行き詰まって困っているのは、我々日本人、ここにいるほとんどが社会に対して無責任なのです。社会人としてのあり方、または社会性、心、価値観、生活文化、そういうものを誰かがどこかで教えていかなければいけない。いちばん最初は家庭のはずです。それがいま崩壊してしまっているのです。

先ほど委員が「3歳のときに何を教えたらいいか」ということでしたが、正直言って委員もわからないわけです。祖父母の世代になった人たちが、何を教えていいかわからないという、いまはそういう社会なのです。個人個人が悪いのではなくて、日本人全部がそうなのです。何を言ってもいいか、何を教えていいかわからなくなっているのです。

最低でも、民族学の言葉で「基層文化」といわれる、生きるに必要なもの、風俗、習慣、言葉、衛生感覚、価値観、生活文化等は、生まれてからすぐ教えていくわけです。

親がそれだけの力がなかったら、周囲の大人が、または祖父母が教えていく。ところがいまは、その形が日本にはなくなってしまっている。だから家庭でも教えられない。社会では男なのか、女なのか言えない。男だからこういうことを知っておけ、女だからこういうことをするなど、これも言えなくなってきている。全く平等な人間として、我々はいま何を教えるか。おそらくこれがはっきり言える人は、日本人では今いないと思います。相当な学者でも言えないです。これは知識の世界ではなく、生きている現場のことですから。

私は何十年間も、世界の民族を見てきたのですが、我々は理屈で生きているわけではなく、現場によって生きているわけです。その現場を知らない人たちが教育するのは理屈です。生き方、生きざま、生きる力、感動する心は理屈では培えない。そのことをもう1回確認することが必要なのです。教育はもともと学校ではなくて、伝統教育という形で、家庭や地域社会がなしていた。それは生きるための基礎を教えていたのです。その生きるための基礎教育が日本はいまなくなってきています。だからそれを何とか作っていかねばいけないのではないかと、ということで体験学習を導入したのだと思うのです。

**委員** 私が質問したのは、何をしつければいけないのかということについては、今日だけでも種々さまざまな意見が出ました。会長は会長で、それぞれの委員も自分の経験に基づいて言われる。まず根源的にこれが必要だということは会長も言われたし、ある委員はそれに補充していますし、ある委員も自分の経験の中で、しつければならないというものがすごく多いです。言おうと思えばこれもしつければ、これもしつければ、これもやりましょうと言って、3歳、4歳の子どもにいきなりそういうものを雨あられと降りかけたら、子どもはまいってしまいます。

基本的に、根底になるものは何なのかということ、やはりもう少し大人が絞るべきではないかという考え方があるのです。そして、最低これだけは家庭でやりましょうというものを、みんなの共通理解で押さえていかねばならないものがあるのではないかと。みんなサポートしましょう、共同でやりましょうと言っても、その押さえられている根源になるものがみんなばらばらで「さあ、やりましょう」と言ったら、車はどこへ行ってしまかわからないのです。ですから、まず子どもたちを育てていくときに、最低3～4歳の幼児のころには、これだけのことはどの家庭でもみんなやりましょう、というものをきちんと押さえて、出発する必要があるのではないかと、思うのです。

私自身、たしかにわからないところもありますが、最低このくらいことはやったほ

うがいいということは、自分なりに持っているつもりです。そんな抽象的なことでもありませんし、できるだけ具体的にしたほうがいいと思っています。文化云々ということや抽象的に言ってもなかなかわかりませんので、最低、このように具体的にやったほうがいいのではないかと、こういうことは子どもに教えたほうがいいのではないかと、こういうことはみんなでやっていきましょう、ということ具体的に示したほうがいいのではないかと。

私はその中から、最後に提言したいことがあるのです。実は、この懇談会が始まる時に、教育委員会から「平成11年度の杉並の教育」という冊子をいただきました。それから社会教育センターから出ている要覧をいただきました。私はこれを全部くまなく読みました。今日に備えて、どのくらいの社会教育が行われているかということを読みました。実に素晴らしいです。杉並区というのはこれほどいろいろな多岐多様にわたって社会教育をやっているのか、すごい区だなと、まず最初に思いました。

その中で、今日のテーマに合ったところは、社会教育センターの中にある「家庭教育学級」という所と、ここには書いていないのですが、17ページに「幼児家庭教育セミナー」というのが書いてあるのです。その幼児家庭教育セミナーは、残念ながら13人しか出席していないので、たぶんこれは取り止めになったのかなと思うのですが、そのテーマは「生き生き子育て、心と身体の豊かな成長を願って」というもので、いろいろな専門の先生方が来て講演をしている。これは題目を見ただけでも、やはり素晴らしいと思えました。

ですから、この社会教育センターのやっている事業というのは、本当に多岐多様にわたっていますが、いま話題になっているいわゆるしつけとか子育ての問題となれば、この家庭教育学級や、幼児家庭教育セミナーで何をやるかといったら、やはり何をしつけるのかという、基本的なところをやっていくべきではないか。そして、みんなでそのところをもう少し考えながら、そして共同歩調に合わせながら、最低、家庭が全部違っていてもこれだけはやりましょうというものを確認し合いながら進めていく必要があるのではないかと。

それが小学校、中学校になると、家庭教育学級にこれが発展して行って、そしてそこでまたそれをさらに続けていく。それと同時に、皆さんが言われているように子育て支援のネットワークというものを、個人では不安であるということは確かですから、その辺を広げて行って、そういう不安などというものをお互いに解消できるようなネットワークを作りながらやっていくということが、現実的な姿ではないかと思えます。

会長 結論を言っていたように、大変まとめになったと思うのですが、せっかく傍聴者の方がいらっしゃるから1人くらい、杉並区はこういうものを作れということがあれば、一言どうぞ。

傍聴者 阿佐谷南に住んでいます。資料の「家庭教育に関する主な事業」という所に、1とか2とか3と書いてあります。私は中学校に勤務していましたので、1番の「家庭教育学級」も、「子どもの地域活動」も、生徒会を中心に一緒にやってきました。3番なのですが、私も退職をして、いま地域に広場を作りました。でも、いま私は行政にお願いしたいのは、本当に子どもが大事だということを、皆さん話されました。本当に子どもが大事なのだと。21世紀に向かって、学校教育だけではなくて、地域で子育てをすることが大事だと言われている時代ですから、先ほどある委員が保育園のことも言われたけれども、例えばいまの保育園の中で子どもたちが保育されている状況、そして入園を待っている待機児の多さ。同時に地域の中で「本当は支援をしてほしい」と、私の広場にも最近親子が来るのです。家の中でずっと子育てに詰まって、遊びに来るとい親子がいるのですが、そういう状況を見ていると、私はいま行政がそういう仕事を地域に丸投げと言ったら言い過ぎかもしれませんが、丸投げするような状況になっていないかなと感じています。

私はボランティアでやることは嫌でも何でもないので、もう少し子どもにかかる行政の仕事、例えば保育園の問題で言えば、東京都の基準を、いま0歳、1歳は3人に1人の保育者と言っているのを6人にしようとか、子どもにかけようという行政の仕事を、ないがしろと言っては悪いのですが、そういう状況が一方にあるのです。だからそのところをもう少し、できるなら私は委員の方々にも資料を出していただきたいと思っているのです。待機児が一体どのくらいいるのか。

それから先ほど「子育てサポート」というものがありましたが、子育ての手助けをしてほしい人と、手助けができる人のバランスがいま合っていないのです。それもここには、これだけを読むととてもうまく書かれていますが、実はしてほしい人と、してあげたい人のバランスは全く合っていないわけですから、その辺のところもいま杉並区がどのような現状になっていて、何をしなければいけないのか。このような言い方をしているのは悪いのですが、今日は皆さんのお話としては面白かったけれど、もう少し次回は杉並区では何ができるか、というあたりをもう少し突っ込んで、現状と合わせながら議論していただきたいと思っています。

会長 どうもありがとうございました。今日の懇談会で、家庭教育のあり方全部をディス

カッションすることはできなかったと思います。しかし、大体のところ、私は2つに集約できるのではないかと思います。

まず、「子育て支援ネットワーク」というものが、いろいろな形で杉並区にはあるけれども、実際にはどのように機能しているかを考えて、集約して、もう1回作り直すことが、非常に重要ではないかと思うのです。

女性が妊娠、分娩、育児をして、もちろん男性も手伝うわけですが、そういう生命のバトンタッチをするときには、エモーションナル・サポート(emotional support = 感情を伴う援助)が極めて重要であるということは、多くの人が指摘しています。ですから、初めてのお子さんのときは、特に頭がいっぱいになってしまって、どうしたらいいかわからなくなる。

私はある女性の文化人類学者と大変親しくして、その人からいろいろ教えを受けたのですが、その人は「ルーラ」という考え方を言っています。妊娠、分娩、育児をするときに、助ける人が必ずそれぞれの伝統文化にはいたと言うのです。日本もお産婆さんもいたし、そういう人がいたわけです。それが戦後の荒廃から経済の立て直しのために都市に人口が集中して、核家族化して、母親が子育てを押しつけられて、誰も助けてくれないという状態が続いたからだと考えたらいいのではないかと思うのです。昔は、お母さんが子育てをするといっても、大家族でしたからおばあちゃんもいたし、おじいちゃんもいたし、みんなで助け合っていたと思うのです。ですから、杉並区には、ほかのどこにもないような、日本でいちばんいい助け合いシステムを作るということが、私は1つの重要なことだろうと思います。

その「ルーラ」というのは、ギリシャで妊娠、分娩、育児のときに助ける女性のことを言うのだそうです。そもそもの意味は「奴隷」という意味なのだそうですが、ギリシャで「ルーラ」と言ったときは、大変尊敬されるのだそうです。男性の「ルーラ」はまさに奴隷で、あまりきちんとした職業でないように考えられているという話です。そういった杉並区として、地域の子育てを支援するシステムというものを、いまはいろいろとばらばらにあるようですから、それを整理して、どのようにしたらいいかということだろうと思うのです。

それからもう1つは、家庭教育学級だろうと思うのです。それは専門家によるいろいろなレクチャーもさることながら、子どもたちのそういう教育をすること、例えば学生くらいになったら、どこかの保育園で子どもに触れてみるとか、高等学校でも男の子も女の子もそういう機会を作るとかという、家庭教育というものをもう少し広く整理して



やっていったらどうだろうかと思いました。

今日は限られた時間で、十分にディスカッションできなかったと思いますが、またもう1回元に戻って来て、話し合いをする機会もあると思いますが、今日はこれで終わりにしたいと思います。次回は11月21日午後6時半からです。その次の日程調整は事務局からお願いします。

**副参事** それでは次々回になりますが、12月に開催したいと思います。事前に予定を確認したのですが、12月19日火曜日で、同じ時刻でお願いします。それから、次回の会場は、6階の第4会議室になりますので、よろしくお願いします。

**会長** それでは、どうもありがとうございました。